

## 気ままに生きた男の死

永川玲二という男がいた。英文学者、スペイン文学者で翻訳家でもある。平成十二年四月に亡くなつた。

東京大学英文科を出て、どこかの大学の教師をしていたらしいうが、四十年くらい前に奨学金を得て、イギリスに渡つた。シェークスピアの研究をしようといふのである。ところが数年後にはスペインに渡つて、主としてセビリアを中心に生活を始める。それからは時々日本には帰つていたらしいが、住所は常に在スペインとなつてゐた。

平成十一年の中頃からは、北九州の大学でスペイン文学を教えていたらしいう。昔の小倉の南はすれの方に住んでいた。北九州だの小倉だのといふと、関西以東の人は私の住んでいる山口市とはかなり離れていると思われるかも知れないが、山口からはバスと新幹線とで待ち時間を入れても一時間そこそこである。自動車でも高速道路を利用すればやはり一時間そこそこで行ける。簡単に往復できる距離である。せつかくそれほどの近くにいるのだから色々話をしたいと思つて、平成十二年の春の一日彼の勤めている大学に行つた。

何しろジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』を丸谷才一氏、高松雄一氏と一緒に訳した男である。そのひとことだけで十分に尊敬に値する。会うやいなやどこへ行こうかといふ話になり、こんな大学者がどこに連れて行くかと思つたら、大学の近くのまさに汚いだけと言つてもいいような居酒屋に連れて行つてくれた。

親父が一人いるだけで、永川曰く、「ここは汚いが料理はうまい」が最初の一言である。そう言つて座り込んだ。その店に入つたのは午後五時くらいであつたが、結局、話が終わつたのは午後十一時を過ぎていた。

彼は女房もいなければ勿論子供もない。兄弟がいることは分かつてゐたが、すでに当人が七十歳を過ぎた老境である。今まで実に気ままな生活をしてきたらしい。私が聞いたのは「君はそもそも英文学者として出発したのに今は何でスペインにいるんだ」ということであつた。

彼は何とも気まずそうな顔をして次のように答えてくれた。

「シェークスピアの研究はイギリスに限ると思つて行つてみたんだが、調べてみるとその原典は殆どスペインにあることが分かつた。勿論それがシェークスピアの評価を云々するようなことではないのだが、おもしろそうなのでスペインに移つたら、そのまま居心地がよくて居座つてしまつた」

何しろ放浪者と言つていい生活をしているらしく、しおちゅうピレネー山脈に登つて、フランス側に降りたりすることも多かつたらしい。

「すべての物価はスペインの方が安いが、卵だけはフランスが安い。フランスの卵は例のプロ

イラーワ式で作るから安い。但しうまさはスペインの方が間違いなしにうまい。何しろスペインの鶏は全くの放し飼いで、夜は地上から小枝に飛び上がって寝るという全く野鳥のようなもんだ。卵を割ると黄身が半円形になつてゐる」などといふ他愛もない話をしてみたり、アメリカにはボストンで上陸して、結局、南米までバスと徒歩とで行つたとか、パリからネバールまでを同じように全く飛行機を使わないので行つたとか、聞いてみればかばかしいが、結構おもしろい話をしてくれた。

### 理想の人生、理想の安樂死

この永川玲二が急死したのは、その二、三ヶ月後だつた。

後で聞いた話では、何でも前記の放浪癖で、少し風邪気味なのに韓国に旅行して、東京へ帰つてから酒を飲んで転倒し、そのまま頭を打つてしまふ誰も気がつかず数時間放置されたまま、誰かが気がついたときにはもうや瀕死で、病院に運び込んだがそのままこと切れたという。永川と交換した名刺がどこかに残っていたのだろう、「永川玲二を偲ぶ会」をやるので東京まで出てこないかという書状が來た。発起人は丸谷才一氏になつてゐる。新聞に大きく死亡記事が出たので死んだことは知つてはいたが、あの永川がと思う驚きと、発起人が丸谷才一氏であるのに二重に驚いて、早速出席することにした。

出席してみると、ざつと目勘定でも男女を交えて百数十人の参列者である。席上最初に丸谷才一氏の挨拶があつて、「今日何人かのご挨拶があると思うが、どれだけ永川に迷惑をかけられたという言葉が飛び出すか予想もつかないと思います」と言われたのには、心底驚いた。

丸谷氏がそう言われるくらいだから、ここに来ている人の多くは永川玲二という男に、大いに迷惑をかけられたに違ひない。その迷惑をかけられてしまったと思われる人々が、その男を偲んでこれだけ集まるとはと、ちょっと腑に落ちない話だとさえ思つた。

しかし、実は永川玲二と私は広島陸軍幼年学校の同期生である。その同期生のうちから参列した二人以外は全然面識のない人ばかりである。その面識のない人たちにおそるおそる聞いてみると、結構、永川先生にはお世話になりました、特にスペインではお世話になりましたといふ人たちが多数いる。

やはり、丸谷先生の仰しやることく永川玲二という男は、会えば迷惑至極の男だが、いなくなつたら途端に懐かしくなるような人徳の持ち主だったのであろう。そうでなければこれほどのお老若男女が集まるわけではない。第一、出席はご遠慮申し上げたが、今年もまた第二回の「永川玲二を偲ぶ会」があつたのだから大したものである。

日本を俺が動かしていると思える地位にまで上り詰めるのも人間としての満足すべき一生であろうし、激烈な選挙を何年に一回は戦い、それに勝利して議政壇上に立ち熱弁を振るい、或いは大臣や副大臣になつて国政を牛耳るのも、人間の本懐であろう。

しかし、何物にもとらわれず、自由気ままに世界中を放浪し、時にスペインの小都市に引きこもり、日本から来た人間を泊めて、話に花を咲かせたり、一緒にビレネー山脈で何日かを過ごすという、まさに自由そのものといえる生活を送るなどというのは、通常の人間なら夢見ても実現できない生活である。

親しい人からは、いれば迷惑だが、いなくなると實に懐かしい、などと言われるのはそれなりの人徳があつてのことだろうが、そのほかの能力、度胸、やる気などを兼ね備えなければ出来ないことで、私などにとつては夢のまた夢であり、その上、東京の真ん中で（新宿の近くであつたという）意識不明で発見されて息をひきとるなどというのは、想像を遥かに超えた生き方、死に方である。まさに理想の人生を理想の安樂死で終わつた男である。

### 人生の最後くらいは自分の決断で

こういう生き方は殆ど的人が出来るはずがない。

第一、人間は生まれたくて生まれてきたものは一人もいない。生まれるについてはこちらの

意志とは全く関係なく起ることで、自分の意志が関与するところは一切ない。致し方なく生まれて致し方なく生きているのが普通で、死に至るまでにはおもしろいと思うこともあるだろうが、大半はイヤだ、イヤだの連続である。

時におもしろいとか愉快だとかいうことはあつても、それが過ぎればまたイヤだ、イヤだが始まると。イヤだの時間と愉快な時間を比べたら人によつては百対一から一万対一になるくらいだろう。所詮人間は好きか嫌いか損か得かでしか生活していない。好きで得だとうものはまず人生で巡り合つてもせいぜい数回だろう。馬券や宝くじを買ったことがない男から見ると、何のために買うのか分からぬ。分からぬから仕方なしに聞いてみると当たるであろうと思っている間がいい、その間に夢があるという。

そんなもので夢を見ることが出来る人は幸せといえば幸せである。自分のことを申し上げて恐縮だが、人生をそれなりに送つてゐるくらいおもしろい賭け事はないし信じてゐる。それに多いのならば（ならばではなくて、のだからといふべきであろう）、イヤだと思うことのなかにわずかな楽しさを味わい、明日はボツクリ行くかも知れない可能性が十分にある人生を送れば問題にはならない。

生まれることはこちらの意志ではどうにもならず、生きていてそんなに楽しくないことの方が多いのならば（ならばではなくて、のだからといふべきであろう）、イヤだと思うことのなかにわずかな楽しさを味わい、明日はボツクリ行くかも知れない可能性が十分にある人生を送